

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 元年 6月 21日現在

機関番号：22702

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K11818

研究課題名(和文) ライフヒストリーを生かした精神看護学教育実践サポートの研究

研究課題名(英文) Support for educational of psychiatric nursing drawing on life history

研究代表者

神 恵子 (SAKAKI, Keiko)

神奈川県立保健福祉大学・保健福祉学部・教授

研究者番号：90235135

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、精神看護学担当教員のライフヒストリーを、記述的に探究し、教育サポートについて検討することを目的とした。個別インタビューを実施し、精神看護学が科目として独立した歴史的社会的現象と、個々の教員のストーリーの、それぞれの教育活動への影響に焦点を当てて、分析した。分析結果から、科目独立によって担当教員が必要になった結果、精神科看護の経験のない教員が時代を受けとめながら教育に寄与したこと、個々が生活史から得たものが、教育の原動力として教育活動を創り出していることが明らかになった。教育実践力向上に向けて、自己体験を振り返り活用できるようになるサポートが望まれる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

精神看護学の科目としての独立によって、精神看護学担当教員が不足したこと、およびその社会変化に対応して、精神科臨床経験はないが精神看護学教育に携わった教員が、新たなチャレンジとして精神看護学教育を教員人生に組みこむ体験が明らかになった。また、研究参加者となった教員は、教員になる前からの生活や臨床体験、教育体験の中から自分自身のありようを問う動機を持ち教育活動に反映していた。そこから、教員が自己体験と教育体験のつながりに自覚的になれるように促進していくことの重要性が示唆された。こうしたライフヒストリーの蓄積は、教員個々がその人らしい教育活動を創出できるための知識の蓄積として学術的意義がある。

研究成果の概要(英文)：This study aimed at examining educational support by exploring life history of psychiatric nursing faculty in a descriptive manner. Individual interviews were conducted before analyzing the data focusing on respective impact, on educational activities, of historical and social phenomenon based on which psychiatric nursing was established as a subject, and stories of individual teachers.

The results of the analysis revealed: When teachers were required for the now separate subject of psychiatric nursing, those who hadn't had experience in psychiatric nursing made educational contribution in response to the needs of the times; and lessons gained by each teacher from their life history have driven their educational activities. To improve their practical educational capability, it is desired to provide teachers with support that will encourage them to reflect on and utilize their own experiences.

研究分野：医歯薬学

キーワード：精神看護学 教育実践 ライフヒストリー

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

地域ケア中心の医療に向けて 1987 年精神保健法が成立した後、精神保健医療政策は大きく変化し看護基礎教育における精神医療や看護教育への期待も高まった。ところが、精神看護学教育の保健師助産師看護師学校養成所指定規則上の看護カリキュラムにおける科目としての独立は遅く、10 年後の 1997 年であった。当時、精神科看護の臨床経験がある専任教員は 34.9%と非常に少なく(日本精神科看護技術協会,2003)、教育の人材への危惧があった。その後も精神看護学の教育の質や体制について問われ続けている。

先行研究を概観すると、教師個人の体験のリアリティを重視するライフヒストリー研究による教師の成長や教育カリキュラムに関する研究が積み重ねられている。とくに、Ivor F. Goodson(2001,2006)は、国際的な教育研究者として世界各国での研究を積み重ね(Downs, Yvonne.,2013)教師が授業のなかに自己を投影していることを指摘し、教育力の向上や教師の成長のためには、教師の生活や経験を明らかにすることが重要だと強調してきた。国内でも、教育活動が行き詰まり、うつ病や適応障害など教員のメンタルヘルスの問題が深刻になるなか、学校教師のライフヒストリー研究に関心が寄せられるようになり、学校教師やその教育と社会や文化の関係について研究されるようになった(塚田,2002;山田,2009)。

看護学の分野では、看護学教員の役割やアイデンティティの不明確さの指摘がされてきたが、看護教師の力量形成について、ライフコースの視点から明らかにする研究が組み込まれ(石塚,2011)ようやく看護教員自身を対象とした教育力開発のための教員サポートを検討する研究が萌芽しつつある。

本研究の課題は、精神看護学教員はどのような体験をしているのか、その体験から何を、何を問題に感じてきたのかを明らかにし、こうした体験を通じた教員その人の声を反映させる教育サポートについて考察することである。

2. 研究の目的

本研究は、精神看護学教員のライフストーリーについて、1)精神看護学の科目としての独立の歴史的社会的現象がどのように影響しライフヒストリーを形成しているのか、2)精神看護学教育実践に教員個々の生活を含めたライフストーリーはどのように影響しているのかを、探求する。さらに、教員その人の声を反映させた教育実践のサポート方法について考察する。

3. 研究の方法

研究参加者へのインタビューを行った。同時に精神看護学としての科目の独立に関連した歴史的社会的背景について文献レビューを実施した。データは、参加者の教育活動と生活史、歴史的社会的背景を視点にライフストーリーとして検討し、総合的多元的に分析した。社会的背景として、とくに精神看護学の科目の独立を一つの視点として取り上げ、ライフヒストリーとして分析した。さらに、参加者がライフストーリーを精神看護学教育実践にどのように活用しているのか明らかにした。

4. 研究成果

(1) 精神看護学の科目独立に関連した背景

精神保健および精神的支援の社会的ニーズが高まった 1990 年、看護カリキュラム改正が行われ精神看護学の科目設置が検討されたが、看護カリキュラムについての学校の自由裁量、授業時間数削減、基礎看護学の充実に主眼が置かれ、精神看護学関連では、精神保健

の科目設置にとどまった。その後、看護系大学において科目として精神看護学が置かれ教授されていた事実や、いじめ、家庭内暴力、うつ病や自殺、高齢化社会などによる社会的ニーズが益々高まるなか、1997年によろやく科目としての独立を果たした。

一方で、1994年の調査(武井・稲岡・小宮)では、精神科看護の臨床経験がない看護教員が、看護系大学でも21校中5校にいるという結果で、教授できる教員が不足している状況があり、精神看護学を教授する専門家の育成の必要性が示唆されていた。

(2) 精神看護学教員のライフストーリー

精神科看護の経験がない教員のライフヒストリー

A教員およびB教員が対象となった。A教員は、科目独立後3年目に看護専門学校2年課程に教員として赴任した。精神看護学の講義は外部講師、精神看護学実習は新人教員が担当することになっていたので、精神科看護の臨床経験は無かったが、早速実習指導に携わった。学生時代の精神看護学実習での不全感を思い出し気が進まなかったが、初めての実習施設で出会った病棟師長が学生を受け入れ励ます姿と学生の成長を見て精神看護学に関心を持つようになり担当教員となった。社会の動きが地域生活支援に向けた2009年カリキュラム改正を契機に、グループホームでの実習を取り入れ広い視野と地域生活支援の視点を取り入れた。ある研究会のメンバーに「(臨床経験が無い)だからこそできることってあるんじゃない」と言われ勉強を続けてきた。

B教員は、科目独立年度に精神看護学教員となった。それまで講義は外部講師が行っていたが、内部の教員が担当することになり、声を掛けられたという。臨床経験もなく研修もなく学生の前に立てないと言ったら、「(研修に)出してあげる」と上司から返事があり、悩んだ挙句、覚悟に覚悟をして精神科病院に研修に行った。しかし、そこで、患者を受け持ち、研修を続けるなかで、患者の回復の難しさや家族を含めた関わりの重要性を実感し、同じ学校内の精神看護学を担当していない、誰も分からない世界を本気でやってみようと思うようになった。同時期、老年看護学や在宅看護学も指定規則上のカリキュラムが改正され、学校全体が大変な状況だったので任されたことをやっていくしかないところもあった。実習指導で孤独な体験もしたが、サポートも得てやってきて、勉強になったし後悔はない。

自己の生活体験と教員体験のつながり

C教員は、若いころ跛行を余儀なくされる障害を負いそれまで追ってきた道を諦めて看護学校に進んだ。仲間の影響や家族の病気が重なるなか、「なるべくして」精神科病院や作業所で働くようになり、精神看護学を教える非常勤講師となった。学生のくいつきを見て現場の話を使った講義を行った。「絶望するのは病気だけじゃないので、そこを看護師が分からないと。それは寄り添うとかきれいごとではない」「聴く耳のありかというか、ケースなどの書式に出てこないような個別の声を聴きとれるかどうか」と考えていた。

D教員は、腫瘍の手術を受けた後、社会福祉学を学んでいるときに、アルバイトで精神看護に携わった。アルバイト先での職員の関わり方に疑問を思うこともあったが、その頃、看護教員の道に誘われ精神看護学の担当になった。腫瘍と手術という自分の人生が変わってしまうような体験を基に、社会福祉学で学んだ歴史とかハンディを持つことへの意識を合わせて、学生の実習での対象理解が深まるように関わりたい。

E教員は、父親が精神疾患である体験をしてきた。そのころ、女性が自立するための選択は教員か看護師かという時代だったため、看護師になったが、看護学校では家族に精神障害者がいるのは自分だけでないことを知った。精神科病棟で働くようになると「家族の

ために語れる言葉があるのではないか」と思うようになった。病院の組織再編により看護師教育にも力が入られるようになったが、その後、経営中心になり患者が置き去られるようになった。その時、求人を見つけて看護教員になった。自分が育てた学生が何かしら残してくれれば多くの患者に反映されると思うし、父親がいたからこそ、この職に来て、今があると思う。

F教員は、自分の生活に合わせて職場を替えてきた。家族の転勤に伴って精神科に就職し子育ても行い、最終的に専門学校に誘われた。カリキュラム改正に沿って精神障害者が社会で「その人らしく生活していく」ことについて、どう教えるか考えている。自分の教育の原動力は、幼少時に兄弟が精神障害者に殺害されたことで、兄弟の体験について読み解きたいという深層の動機があったからだ。最近はそのような体験を学生にも話している。被害者であって精神科をやる辛さを聞かれることがあるが、「だからこそもっと知りたい、人間を知りたい」と思う。

G教員も、出会いによって精神看護の領域に携わるようになった。親の勤め先の近くの病院の精神疾患患者への関心と、生活の自立のために看護師になったことによる出会いである。勤めた精神科病院で看護師による患者の自立度についての評価のばらつきに関心を持ち、データとして学会発表したのが教育への入り口になった。専門学校、短期大学、大学と地元の依頼を受けて場を替えながら今に至っている。カリキュラムの変更で実習時間も増えてよかったが、根底にある看護における臨床心理学的な概念を教員が体得することが大事だと思う。

学生、あるいは看護師としての体験と教員

H教員は、大学に入学後、女子集団が合わず悩んだ末、苦手なことをやることで自信を持ちたいと思って、看護専門学校に進んだ。最後の実習だった精神の実習で、20歳代半ばの話しかけても反応しない患者に出会い、こんな世界は初めてと心が燃え、関わるなかで、自分の居場所を見つけたという感じがした。自分の青年期の孤独な悶々とした日々も重なって、精神病院に就職しようと思った。精神科病院など勤務し、同期に刺激されて大学にも通った。患者に巻き込まれるなかで、自分の心を客観的にみるもうひとりの自分のトレーニングをしてきた。ある日の知人からの電話がきっかけで教育に携わるようになった。学生から聞かれて自分の話をすると、こういう生き方もあるんだと面白がってくれる。教員の仕事は思ったより奥深く、研究は死ぬまでやれるという発見もした。精神看護学のプロセスレコードでは、学生と一緒に自分に向き合っている。自分で自分を見ることの興味は精神科看護師時代から続いている。

また、I教員は学生の時、「精神看護学の授業が最も面白く、看護の基礎教育の大切さを知ったので、精神看護学の面白さを伝えたい」と語り、J教員は、「精神科での勤務で親子関係や不登校や虐待について考えさせられ、感情移入したところ、男性患者から叱責され泣いたこともあったが、自分もありのままでもいいと思ひ癒されて精神看護に携わっている」と語った。

(3) ライフヒストリーを活用した精神看護学教育実践

1997年の精神看護学カリキュラムの独立の影響として、精神看護学教員の不足によって、看護師としての精神科看護の臨床体験がないにもかかわらず、精神看護学教員として教育に携わる現象が起きていた。研究参加者からは、悩みながらも引き受けたが、事前研修や実習指導を通して出会った患者や実習指導者に刺激され深い体験を持ち、逆に臨床経験がな

いからこそできることを追い求めつつ、やがて興味関心を深めながら、満足感や達成感を得ていた体験が語られ、周囲のサポートを受けながらも、カリキュラム独立が教員としてのキャリアに大きく影響していたことが明らかになった。また、同時期に老年看護学や在宅看護学のカリキュラム改正があり、精神看護学カリキュラムの独立は時代の流れの一端であったことが、担当教員の教育活動への前向きな向き合い方に影響していたことや、当時の看護教員に限られた人材を駆使していたことが明らかになった。このことは、看護学における専門性とは何か、誰が教育に当たるのかという問いを投げかけてもいる。

一方で、「なるべくして」と語ったC教員が一証言者となっていたように、研究参加者の語りから、精神看護学教員としての実践は、過去の自分のストーリーにつながっていることが明らかになってきた。

ライフストーリーは、「自分自身が障害を負った痛み」「精神障害者のどん底の家族体験」や「家族の被害者体験」「患者に巻き込まれる自分を見るもうひとりの自分体験」など、参加者個々の、人生上のあるいは職業上の大きな出来事との関連で語られた。その体験は、E教員やF教員のように教育活動の原動力となったり、D教員のように、自分の当事者性からの投げかけになったり、H教員のように学生と共に探索するテーマになったりしていた。

精神看護学は人とその人の生きにくさを対象としているために、対峙する教員自身は自分を問われることが多い。研究参加者は、精神看護学教員になる前から「自分自身のありようを問う動機」があったり、精神看護学教員を選択し教員になる道のりで、自分を問う体験をしてきたと推測された。さらに、学生に講義や実習指導に関わるなかで、自己の体験を投影し思いを託し、教育活動を通して自分自身のストーリーとアイデンティティの再構築を行っている。

研究参加者から、意図的に自己のライフストーリーを活用しているという語りも聴かれた。D教員やF教員は自己体験を看護体験や生活体験のなかで昇華し、実際に学生に語りながら、共に看護者として考える教育実践を構築していた。またE教員は、学生に関わることそのものが自分の家族体験を活かすことにつながっていると自覚していた。H教員のプロセスレコードを通じた学生との関りも、臨床体験から得たテーマを教育に反映させていると言える。こうした教育実践のつくる相互作用のなかで、教員は学生に、自分として、看護師としてのありようを投影し、学生はそれを受けて学んでいるのではないだろうか。

日々の教育実践活動のなかでは、教員自身のストーリーを語り交換する機会は少ないが、教育実践能力の向上のためには、自分自身について語る場を設けたり、あるいはそうした場への参加を促したりすることによって、自己体験と教育体験のつながりに、より自覚的になれるように促進していくことが大切ではないだろうか。それによって、自己のライフストーリーを活かした、教員個々、その人らしい教育実践を創出できるのではないだろうか。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

榊恵子、精神看護学教員とピアサポートグループ、看護教育、査読無、57巻、2016、pp. 738-741

〔学会発表〕(計6件)

Keiko Sakaki, Kayo Kitahara, Sachiko Takano, Utilization of teacher' life

history to support students' psychiatric field experiences ,22th East Asian Forum of Nursing Scholars,2019.1.17(Havelock Road, Singapore)

榑惠子、精神看護学教員の自己の体験と教育活動-教員のライフストーリーを通して-、第 61 回日本病院・地域精神医学会総会東京大会、2018 年 12 月 13 日（東京）

高野幸子、榑惠子、精神看護学の独立を振り返り見えてきたもの-平成 2 年（1990 年）精神保健から平成 9 年（1997 年）精神看護学設置に焦点をあてて-、日本看護歴史学会第 32 回学術集会、2018 年 8 月 25 日（広島）

榑惠子、北原佳代、魚住圭一、精神看護学教育を語るグループの実践、日本精神保健看護学会第 28 回学術集会、2018 年 6 月 24 日（東京）

北原佳代、榑惠子、精神看護学教員の自己理解と成長について-教育体験からの学びを通して-、第 48 回日本看護学会-看護教育-、2017 年 8 月 3 日（香川）

榑惠子、北原佳代、石野徳子、精神看護学教員の教育体験-ある教員の語りを通して-、日本精神保健看護学会第 26 回学術集会、2016 年 7 月 2 日（滋賀）

〔図書〕(計 1 件)

榑惠子、中外医学社、看護職のメンタルヘルス、ナースの精神医学所収、2019、289-291

6 . 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：北原佳代

ローマ字氏名：KITAHARA, Kayo

所属研究機関名：日本医療科学大学

部局名：保健医療学部

職名：講師

研究者番号 (8 桁): 70389708

研究分担者氏名：石野徳子

ローマ字氏名：ISHINO, Tokuko

所属研究機関名：昭和大学

部局名：保健医療学部

職名：教授

研究者番号 (8 桁): 20407406

研究分担者氏名：高野幸子

ローマ字氏名：TAKAN0, Sachiko

所属研究機関名：昭和大学

部局名：保健医療学部

職名：講師

研究者番号 (8 桁): 00806359